

# 下田歌子著『女子の技芸』…現代語訳の取り組みⅠ

大川 知子・織田 涼子・佐藤 幸子・牛腸 ヒロミ・関 登美子

筆者らは現在、下田歌子著『女子の技芸』の現代語訳を試みている。これまで下田歌子記念女性総合研究所では、下田の数々の著作を取り上げており、直近七年程は、その中の六冊の著作を「新編著作集」として再び世に送り出している<sup>1)</sup>。研究所では、今年度から研究員の多様な専門性を活かすと同時に、活動内容の充実を図る為に、グループ活動制度を導入した。本稿を執筆する筆者らの専門は家政学領域、並びに美術領域であることから、数多の著作の中から、この『女子の技芸』を取り上げ、当時の女性たちが学んだ内容を現代人に詠みやすい形で訳を行い、改めて世に送り出したいと考えた。

この著作は、明治三十七年（一九〇四年）から明治三十九年（一九〇六年）にかけて、計四冊出版された『女子自修文庫』シリーズの中の第三編で、東京・神保町にある合資会社富山房から明治三十八年（一九〇五年）に出版された。上編・下編の計十八分野、

全三〇四ページからなるその内容は、養蚕、紡績、染工から裁縫といった衣の分野の他、料理、絵画、写真、速記等、多岐に亘る（表1）。それらは、当時の女性たちが、社会で従事できる職業の指南書として、また、家庭に入った暁にも修めて欲しいと下田が願った分野である。これらは、徐々に女性の社会進出が進み始めた時代において、女性の身体能力を考慮して取り組むことが出来、また、その要素の中に「美的観念」が含まれている点に特徴がある。

表 1. 『女子の技芸』上下編の目次

上編							
第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二
押絵	編物	造花	刺繍	染工	養蚕	裁縫	紡績
機織							
緒言							
下編							
第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
包み結び物	料理	挿花	蒔絵	彫刻	速記	写真	絵画

「緒言」には、十八分野の内、「彫刻」「蒔絵」「刺繍」「速記」については、「より専門の方の教えを乞いた上で書いた」とあるが、その他の、実に十四分野は、下田自身が持ち得た知識で執筆されている。本書は、本としての体裁が異なるものが、確認できたものだけでも二種あり、例えば、国立国会図書館の所蔵本は「明治三十八年一月一日」初版とあり、本稿で用いた実践女子大学図書館所蔵本には、初版は「明治三十八年一月八日」、そして、「明治四十五年六月十五日発行」に「四版発行」と書かれてある。このように版を重ねていることから、本書は一定の販売量があったことが窺える。今回筆者らは、以下、五編（緒言、上編の第一「機織」と第七の「造花」、下編の第五「蒔絵」と第六「插花」）に取り組んだ。

#### 1

伊藤由希子（校注・解説）『婦人常識訓』（一九〇三・二〇一六）、伊藤由希子（訳・解説）『女子のつとめ』（一九〇二・二〇一七）、湯浅茂雄（校注・解説）『女子の心得』（一九〇二・二〇一七）、久保貴子（校注・解説）『結婚要訣』（一九二六・二〇一九）、久保貴子（校注・解説）『良妻と賢母』（一九二二・二〇二〇）、久保貴子（校注・解説）『よもぎむぐら上』（一九三二・二〇二三）があり、風間書房または三元社から出版されている。また、筆者らと同様に、高橋桂子他四名による『新選家政学』を読み解く試みも行われている（『年報』第5号（二〇一九））。

#### 凡例

○実践女子大学図書館蔵『女子の技芸』（明治三十八年（一九〇五年）一冊を底本として現代語訳を行う）。

○文体は、原文に準じ、「緒言」は「です・ます調」とし、その他の本文は「である調」とする。

○現代でも使用しているものの、読み方が難しいものにはふ最初のものにルビを付す。

○内容の明瞭さを考慮し、適宜段落を設ける。必要に応じて、随時読点、鉤カッコなども用いる他、削除する場合もある。

○現代では漢字表記のものは、平仮名から漢字に、平仮名表記が読みやすい場合は、漢字から平仮名に変換する。

○数字は、特定の場合を除き、アラビア数字を使用する。

○旧国名は、原文のままとする。一方、都市名等のカタカナ表記は現在の読み方に統一する。

○挿絵は、本文の内容に照らして、適宜配置する。

#### 緒言

私は、始めこの書を編もうとして、先ず女子が身に付けるべき技術を「女子の工芸」と、「女子の技芸」と二つに分けてみました。そして、今回、本書で後者の「技芸」という名を採りましたのは、少し愚案があつたからです。それは「工」という文字は、何となく「労力」というような意味合いが含まれているように思われ、「技」という文字には、どうも美的観念が籠っているように感じられるからです。

今では、女子の為に「独立自営の道を講ずる」という声が高く

なり、また、各自の生活も、だんだん困難になってきたところから、紡績や養蚕や、何らかの工場に通勤する女子が多くなり、または、電信電話の技手や、産婆や、看護婦や、今一層高いところでは、教育家や医者になる婦人も段々出てきました。これは、誠に我ら同胞姉妹の実力膨張の兆しで、漸くこの地位も高まる流れだと存じますから、誠に喜ぶべき次第です。

それは女子であつても、その修養の仕方、英国ランカシャーの鉱山のように、女工が立派にその職務を尽くして、採掘をやつてゐるということに照らせば、女子だからといって、或る程度まではやつて出来ないことはないでしょう。しかしながら、女子は天性、その骨格から容貌から何からなまでに、華奢に、美麗に、手薄に出来てゐるために、どうしても自然から言えば、過分の力業や過度の労働には耐え得るべきものではありません。

そして、殊に女子の容貌の美は、女子の宝物であるのに、過分の力業、過度の労働は、確かにその美を奪い去ります。その美なる宝物を奪い去られた女子は、勢い資材を奪い去られた人の如く、自棄となり、破廉恥となり、残忍の人となり、ついに社会の徳を破壊する「槌」となるのです。

いわんや子どもを身籠り、かつ、これを教育すべき大任を負う女子には、決して過度の労働をさせてはなりません。そうかと

言つて、遅かれ早かれ今の社会には、所謂、「戸位素餐<sup>しゐぞさん</sup>」を許す余地はありません。程よく、自ら汗をかいて報酬を得る人を尊ばなければならぬだろうと存じます。

そこで、私は何卒女子には、その形態の美に伴う職業、「美的技芸」を学ばせたいと存じます。たとえ生活の為にする職業とは言え、一種高尚なる趣味を嗜みつつ勉めるようにさせたいと思うところから、ここに先ず、主として、それらに属すべき種類のものを選んで掲げたのであります。

そうかと言つて、今の工業社会に、最も有用な女工を輩出しうたうのではなく、女工を配属するならば、なるべく労働に属さない技術に配属し、漸次、社会の進歩に従つて、前述の「美的技芸」を以つて、立派に自営できるようにしたいと思うが故に、ことさらに技術に属する女工を選出したのです。なおかつ、その人の妻となるに及んで、主婦たる者の修めるべきことは、概略でも教えておくように編述したのは心密かに乞ひ願うところがあるからです。

なお、一言言いたいのは、私はここに「美的技芸」を女子に勧めるからと言つて、最も女子に適任の看護や教師のことを疎かに考へたわけではありません。これがあらゆる世界に於いて、女子に適した任務であると言うことは、誰もが是認しているのですが、

ただ、「技芸」という範囲に入することは、少し無理だろうと思ひ、止む無く省いた次第です。但し、美的趣味の最も少ない業でも、古から必ず女子の任務と認め、且つ教えていた種類の技はなお、これに加えることにしました。

この書は極めて無味乾燥だとする反論があるだろうとは思われますが、女子の社会に処して、常識を備えようとするには、先ず、女子その者のなすべき技芸の種類と、その仕方とをざっと心得ておくということは、甚だ必要であろうと存じます。或る人が、「日本では、いまだ書籍は、心を楽しませるに属する物の他に、歓迎されていない」「娯楽の書籍が歓迎されている社会の程度では、未だ文明に赴いたとは言えない。慰めよりも、実用に属する書が歓迎されるように一日も早くしたいものだ」と言われましたが、誠に道理のあることだと思われま

しかし、この書は、決してそれ程に価値のあるものとは、自分でも思いませんが、著者も、この書を書くとして、余りにこのような種類の参考書に乏しいことに、実は驚きの声を上げたのです。そのために、ある技芸においては、一々その専門家に就いて聞かなければ分らないことが沢山ありました。そこで、「彫刻術」は藤田文造氏に、「蒔絵術」は磯矢寛山氏に、「刺繍」は長谷川氏に、そして、「速記」は大澤豊子氏について、説明を乞ひ、かつ、その助けを得て初めて全編を成就したのです。また、「茶の

湯」「插花」「琴」「三弦」等は、従来、我が国女子の嗜みのひとつとして数えられて来たのですが、これらはむしろ女子の遊芸にして、家計の補助たる女子の技芸の中に編入すべき性質のものではないと考え、全てこれらを省くこととしました。

しかしながら、ひとつ「插花」に至っては、高尚優美なる「美的手芸」のひとつとも考えられ、室内装飾の費用を省く点において、多少「家計的趣味」を備えていると言つてよいかと思われるところから、これを捨てるのも忍びず、その梗概<sup>ていがい</sup>だけをかい摘んで、ごくざつと本編中に挿入することにしました。願わくば、「より大なる日本」の母たるべき、我が同胞姉妹たちは、その必要の有無に拘わらず、せめてこれ程の小冊子くらいは、紐解いておいてもらいたいと思います。

明治三十七年二月

著 者 誌

- 1 ランカシャーは、英国西北部にある行政区域で、当時は綿産業で栄えていた。
- 2 その地位にあり、俸給を貰いながら職責を尽くすに至らないこと。あらずじ。
- 3

## 上編「技芸」

婦工<sup>1</sup>をおろそかにしてはならないことは、今更言うまでもないが、近來女子もまた、学問をなすべきものという<sup>2</sup>ことを、奨励するようになつて以来、以前は、女子が四行<sup>2</sup>の一つとして尊ばれた女工に属すべき技芸も、かえつて輕んじられるような傾向があつた。識者はここにおいて深くこれを憂えたのであるが、今から三十五年前から、男女とも実業教育が大切な事に着目する人が段々多くなつて、次第に実業教育の方針も進められるようになったのは、誠に喜ばしいことである。よつてここには、その実業的と美術的とを問はず、女子が学ぶべき技芸の主なるものを逐次掲げ記して、後進女子の参考の一助にしていだきたいのである。

1 婦工<sup>ふこう</sup>…四行<sup>しこう</sup>(四德)の一つ。婦功とも言う。婦人の仕事。妻のなすべき仕事。『中日大辞典』大修館書店(二九八七)、『学研漢和大辞典』学研プラス(一九九二)。

2 四行<sup>しこう</sup>…四德とも言う。婦德・婦言・婦容・婦功の婦人<sup>しこう</sup>が守るべき四つの行いの事。『広辞苑』岩波書店(二〇一八)。

## 上編・第一 機織<sup>きしよく</sup>

機織<sup>はたお</sup>る技術は婦工の中でも、特にしなければならぬ務めとして、昔から励んだのである。近くは維新の頃まで、地方在藩士の妻女は、たとえ多くの召使いを使う家でも、その夫のため、親のためには、自ら紡ぎ、自ら織つて、そして、それを自ら仕立てて、江戸在勤の方々などへ送るのは、一つの義務とも思い、また一つの楽しみとさえしていた。分業専門の技術の進んだ今日から見ると、あるいは、回り道と笑う人もいるかもしれないが、国元の妻子が、あえて毎日を空しく過ごさず、人手を借りずに、至敬至親の人の肌身に着ける衣服を調製した、その麗しい心映えと、行為<sup>くわい</sup>としては、むしろ、尊敬の意を払わねばならないと思う。昔、唐の貞女が遠征の夫に送った、回文<sup>かいぶん</sup>錦字<sup>きんじ</sup>の詩の古事<sup>ここと</sup>も思い出されて、大変懐かしく思われる。富貴の家の夫人たちは、たとえ、自ら機に登らなくても、その労力をつくしている様子は、こうあるべきだだけでなく、知らしめたいものである。まして、それ以外の普通の女子ならば、なおさら労力を惜しんではいけない。

回文錦字の詩の古事…中国の北辺の守りにつき、長年帰ってこない夫に、故郷に残る妻は、その夫に対する情を一章の詩に作り、手ずから、錦にその字句を織り込んで、一本を夫のもとに送り、一本を役人に献上した。この話は、時の帝の耳に入り、感激した帝は、夫を妻のもとに帰した、という故事。（『雅文学への誘い』福岡大学図書館コレクション） URL : [https://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/e-library/enji/gabungaku/shiryu/s4\\_51.html#:~:tex=\(二〇二三年十月二日アクセス\)](https://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/e-library/enji/gabungaku/shiryu/s4_51.html#:~:tex=(二〇二三年十月二日アクセス))

徳川時代の織業

維新後、欧州風の織業

## 一 機織の起源及び沿革

神代の織業

我が国の機織は、遠く神代より起こったのである。『古事記』などにも、天照大御神が機殿はたのにおられた時、御弟のスサノオノミコトが乱暴された云々の事が記してある。それから、神武天皇以降の天皇の御世みよとなった後も引き続いて、この技術を営ませられたが、仁徳天皇の時代に、三韓さんかんから伝えられた、かの国風の織業を、全国の民に教えさせられたとある。奈良朝の時代に至り、仏法の隆盛とともに、錦緞きんしゅう絹布けんぷの織業も著しく進んだ。その後の藤原氏専政時代は、美術的工業はどのようなものよりも進歩して、従って、織物の技術も段々盛んになったが、そ

の後戦乱時代には、全体的にこれらの技術は、あまり進歩しなかったようである。そして、徳川時代に至り、また、種々の新式の織物、即ち縮緬ちぢみや絹ちやうができて、従来の織物もまたいろいろ改良された。維新以降は、欧州の新奇の織業にならつて、非常に改良進歩したのであるが、まだどうしても、フランスのリヨンの絹帛けんぷのような、地の揃った光沢の十分なもの、織り出すことができない。けれども、昨年大阪で開かれた『第五回内国勸業博覧会』の出品中には、とかくの評もあつたが、第四回目の時よりは、進歩したには相違ない。

それは、日本固有の織物に新意匠を添えたり、またはことさらに色模様に模したのも、随分面白いものがあつた。リヨン織物に模した物、ゴブラン織なども、なかなかよくできていた。

このような状態で、糸の精選、染工の発達等が助けて、今一層進歩したならば、我が織業もまた、西洋諸国に誇るような立派なものが、追々できる事だろう。是非ともそれまで努力したいものである。

4 三韓さんかん…紀元前二世紀末から四世紀にかけて存在し



たとされる朝鮮半島の南の三つの部族の連合で、馬韓・辰韓・弁韓を指す。『広辞苑』岩波書店（二〇一八）。

5 リヨン・フランス南東部の都市。絹織物の産地。『大辞林』三省堂（二〇〇六）。

## 二 機の織り方

機は経糸を整えてから織るものである。機を綜るには、まず総にした糸の粗いものと、細かいものによつて、幾よみと定め（糸一よみとは八十筋をいう<sup>12</sup>）太い糸ならば、九よみほど、細いのは二十よみほどの経糸を整えて機にかけるのである。織色、または縞飛白などは、まず経糸、及び緯糸を共に染めて、布苔を適度に付け、枠に返して綜台に上げ、経糸を整えてから機台に上げるのである。箴目へ経糸を通すに、二重経というのは、地糸一重片糸一重を入れ、花紋を織るものは、その間に更に絡糸一重を入れるのである（片糸とは箴一目へ糸一筋ずつを入れることを言い、一つ入れとは、箴目一つに糸二筋ずつ入れることを言い、四つ入れとは箴目一つへ糸四筋入れることを言う）箴目は鯨尺一寸に八十枚であるのが普通である。機は織詰

りするものであるから、一尺幅の絹を織ろうとするときは、箴幅を一尺五六分とし織上の部分にしいしを張つて幅を伸ばすのである。もちろん緯糸の太いときは幅の詰りが少なく、細いのは詰まり方が多いと思つてよい。

機を織るには、まず腰掛に腰を掛け、姿勢を正しくし、静かに箴と杼とを取るのである。箴を打つには、肘から力を入れて、手先は軽く真直ぐに打つのがよい。杼も真直ぐに鮮やかに投げる。こうして織りながら裏からしいしを付けて、巻き付けるときに、しいしは取り除く。踏木には両足をかけて、手と足との釣合、調子よく織り立ててゆく。錦綾などの精巧な種類の織物を織るには、高機にかけ、花楼の上に、別に一人、人がいて、掛けた糸を引いて綾を取るのが従来の織り方であるが、近來はこれに代わる、機械を用い、形紙をもつて織るものが多くなった。

6 松川哲哉『新版被服材料』光生館（一九七〇）一〇〇頁。

7 吉本忍「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』十二卷二号（一九八七）。  
8 天野武弘「紡ぐ技術、織る技術―道具の時代の紡

### 三 機及び器具<sup>17</sup>

機の種類は地機<sup>じはた</sup>と高機の二種に区別でき、高機は、地機がだんだん進化したものである。しかし、今は花織、絹織、器械機などと称するものもあるが、皆これも高機の一つである。機の器具の主なるものを言えば、機台<sup>はただい</sup>、綜

- 9 織技術―『産業技術記念館館報』「十五卷」(一九九四)頁等を参照のこと。  
 縦系、横系を経系、緯系と表記する。  
 綜…綜棒で一定数巻き取って輪形に結束した糸をいう。  
 筋…細長いものを数えるのに使う語。  
 綜台…経系を綜る(整える)ための道具。  
 12 箴目…経系の密度と織物の幅を決めるのが箴で、箴には経系を通すスリットがあり、これを箴目という。  
 13 しいし…「しんし(伸子)」ともいう。洗い張りや染色のとき、織り幅の狭まるのを防ぎ、一定の幅を持たせるように布を伸ばすための道具。  
 14 花楼…「そらひき(空引)」とも言う。紋織の装置を花楼装置といい、その機を空引機と呼ぶ。『世界百科事典』平凡社、『精選版日本国語大辞典』小学館、新村出編『広辞苑第七版』岩波書店(二〇一八)、『大辞林』三省堂(二〇〇六)。  
 15  
 16

綾織 縮織 平織

### 四 織物の種類<sup>18</sup>

平織の種類には平絹、練絹、羽二重、太織、節織、銘仙、紬、奉書紬、甲斐絹、八丈織、糸織、魚子織、琥珀織、博多織、仙台平などが主なるものである。  
 縮織には縮緬、山繭縮緬、絹縮、風織などが主なるものである。  
 綾織には、綾糸織、一栗織、畝織、八ッ橋

17

服装文化協会編纂『増補版 服装大百科事典』文化出版局(一九八六)等参照のこと。

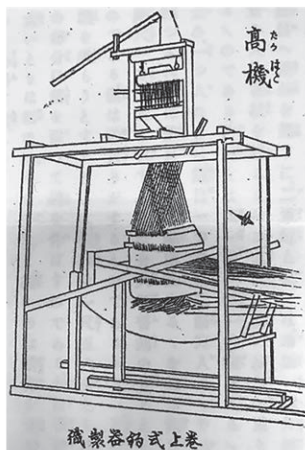


図1. 高機 (p.6)

台、座繰、たくり、掛糸、箴、綾取、杵、畔竹、つむ、板、管、杵、巻板、目通し等である。



毛織	交織	綿織	麻織	透織	紋織
----	----	----	----	----	----

織、縹子などが主なるものである。

紋織には縹子、どんす、金欄織、縹珍、紋羽二重、風通織等が主なるものである。

透織には縹、紗、透綾、明石縹、四ッ入等が主なるものである。

麻織は麻、苧亜麻、生麻布、さよみ、晒麻、越後縹、薩摩上布等が主なるものである。

綿織には木綿、晒木綿、縮木綿、双子織、小倉織、保多織、雲齊織、綿縹、綿フランネル等が主なるものである。

交織には観光縮縹、綿御召、新縹珍、綿羅紗等が主なるものである。これは綿糸や絹糸を交ぜて織ったものを言うのである。

毛織にはモスリン、フランネル、羅紗、カシミヤ、セルなどである。このほかにも、外国には種々の名称の結構なものがたくさんあるが、日本では出来ないものばかりであるから省いておく。

18 日本家政学会編『衣服の百科事典』丸善出版（二〇一五）。

西陣織

## 五 織物の産地

織物の産地について、最も著名なものを挙げれば、まず、東京府下では八王子の糸織、一楽織、八丈島の八丈、そうして京都では縮縹類、琥珀織、綾糸織、風通織、縹珍、金欄織などであるが、京都において織物の最も盛んな場所も西陣である。故に、概称してこれらを西陣織とも言う。大阪では河内木綿が最も著名である。埼玉県下では秩父縹、熊谷の太織、川越の魚子織、五日市の黒八丈、岩槻の千草木綿、蕨町の燃二子、並びに袴地、群馬県下では佐波の伊勢崎銘仙、桐生の糸織、縹子、紗紋御召、並びに女帯地類、栃木県下では真岡木綿、足利の足利縹、糸入り縮、鹿沼の麻織物類、山梨県では甲斐の甲斐縹、千葉県では銚子縮、茨城県では結城木綿、宮城県では仙台平、福島県では川俣の絹、秋田県では秋田八丈ならびに畝織、山形県では米沢織、静岡県では掛川の葛布、愛知県では知多、幡足の木綿、有松絞り、三重県では松坂木綿、岐阜県では山繭縮縹、滋賀県下では長浜縮縹、滋賀の麻織物、長野県では長野紬、上田縮、奈良県では奈良晒ならびに白飛白、福

井県では、福井の絹織物、新潟県下では小千谷の透綾、並びに越後縮、和歌山県では和歌山雲齊、綿フランネル、岡山県では岡山の男帯地類、香川県では高松の保多織、福岡県では博多織、博多紋り、久留米紆、徳島県では、阿波縮、山口県では岩淵縮、鹿児島県では、大島紬、薩摩飛白、薩摩上布、沖縄県下では、琉球紬、八重島の芭蕉布織等、なお台湾では、支那織物に類した製造物を産出するが、あまり織物として多くの発達を見ないようである。

## 上編・第七 造花

造花も、古くからあったものと見えて、『万葉集』などにも、造花のことを詠んだ歌が記してある。これは、人類に美的観念が起ころ以上は、必ずしも造化の神の手だけにすべてを任せるのではなく、自分でも造化の神が造り出した美を模してみようという考えが起ころのは、人間の行動、考えとして当然である。それで、この業は内外共に、早く行われていたに相違ない。

しかしながら、我が国の造花は近来、西洋風

に真似て、改造してから著しく進歩した。舞人などの挿頭の花は言うまでもなく、少女らが簪の造花、仏前の花なども、見るべき程の製作はなかったのである。

今日の造花は、花の中に香りさえも含ませた物も出てきて、一見本物と見誤るほどに進んだのであるが、ただ葉に至っては、まだ西洋の造花に及ばない。これは材料の具合にもよるということである。本物に近く作ると価格が高くなり、商品にならないというのであるが、とにかく、今一層勉強したいものである。

1 舞を舞う人。特に雅楽という。髪につける花は造花を用いた。『広辞苑無料検索』

URL : <https://sakura-paris.org/dict/%E5%BA%83%E8%BE%9E%E8%8B%91/>  
(二〇二三年十一月二十日アクセス)

## 一 造花の種類及び材料

造花の製作には、今よく行われている方法と、古くから花簪などに使用した、「つまみ」との二つがある。「つまみ」はいろいろの縮緬を、花卉や苔、葉の形につまんで作るのである

帽子飾	花簪	枝花	鉢植	材料
<p>が、近來はあまり流行っていない。さて、造花は何に使用されるかというと、まず、帽子の飾り花、花簪、枝花、鉢植などである。</p> <p>帽子飾りに用いるものは、大体花の茎をゴム製にしたもので、西洋の花弁に模するところが多いが、我国固有の花を、帽子に合うように作るのも、随分よいものである。</p>	<p>花簪は、大体茎に針金を用い、また、ゴムを用いる。脚はこれまでの簪の脚も、ピンも用いるのである。最近では鳥の羽や、レースや、リボン等を花に添えたものが流行している。</p>	<p>花瓶や花籠にさす枝花は、大体、茎に細く削った竹を芯にし、青い紙の細く切ったのを、巻き作るのである。また、物によつては、ゴムの芯に細い針金を入れて作る事もある。</p>	<p>鉢植えの花は、大体、枝花と同様の作り方であるが、まず、本当の木に取りつける場合が多い。</p>	<p>造花の材料は絹類（最も多く用いられるものは、羽二重、寒冷紗<sup>かんれいしゃ</sup>、ビロード等であるが、大抵のものは使用できる）、台湾紙（台湾より渡来する木）、紙、糸、綿、竹（細く削ったもの）針金、絵具、染料、糊、ゴム、蠟<sup>ろう</sup>等が、その主な</p>

#### 各種の打抜型

#### 各種の用具

ものである。

## 二 造花用具

造花の用具を数えれば、その名称はあまりに多く無いが、各種の花形、葉型を集めようとする時は、実におびただしい数になる。それ故、バラ、梅、桜など、その他毎回使用するものは、打ち抜き型があり、まれにのみ利用するものは、鋏で切り抜くことである。

さて、その名称を挙げれば、鋏、鋸<sup>のこ</sup>、打ち抜き型、締め道具、糊押し板、篋<sup>へこ</sup>、寄せ鋏、裁ち物刀、裁ち物台、やつとこ、細い竹の串、火鉢、鉢、皿などである。

## 三 造花のしかた

造花は、まずその習い始めには、梅、バラなどのうちで、最も簡単な物を、花も葉も、打ち抜き型で打ち抜いて、取り作ることを学ぶのである。材料も、紙または寒冷紗を使用し、追々技術が進むに従つて、絹をも使用し、かつ実物をも解剖して、なるべく真に迫るように製作す

染物	型抜	縮 縮	鋺	花	花、枝の配り	茎、枝	葉
<p>るのである。</p> <p>造花を学ぶ者は、また、必ず染物を学ばねばならない。それは、上編第五「染工」を参考にすることも造花用の布地は一つの色物を一度に大量に使うことは少ないのであるから、ただ、その色の麗しく、かつ色が褪色しにくい方法を学習し、また工夫して、進歩を計るべきである。</p>	<p>染めた紙でも布でもよいように重ねて、打ち抜き型で打ち抜き、それを、締道具で締めて、筋をつけたり、縮ませたりするのである。そして、葉や花の大小、形状により、種々の鋺を当て、望みの形に、巻いたり曲げたり、また、凹凸を作るのである。</p>			<p>花びらも、目的のように縮ませたり、鋺で丸みをつけたりして、その後に作るのであるが、なお、一つの弁のうちに、色の濃淡があるものは、一度紅なり、紫なりに染めて、弁の形に切つてあるものを、更に寄せ鋏で挟み、茶碗の中に溶かしてある、目的の染料にちよつと局部を浸して染め、干し乾かして後に使用するのである。</p>			<p>姫糊<sup>ひめのり</sup>で、その芯に花弁を貼り作るのである。さて、弁をおおよそ貼り終われば、中央の芯のところへ、蕊<sup>しべ</sup>も適宜造ることができるが、大抵市販品を求め用いることが多い。</p>
<p>葉は前述のように、締め道具で筋をつけた</p>	<p>り、縮めたりしたもの、を、茎、または枝の適当なところへ取り作る事、花弁のようにつける。ただし、葉の照りを出すために、蠟、またはパラフィンを用いることもある。それは、葉の表にも裏にも鋺を当て、仕上げた上で、その葉を火の上にかざし、蠟なり、パラフィンなりを、葉につけて塗るようになれば、溶けて全体に引くことができるのである。椿や山茶花等の葉は、是非、これを用いねばならない。</p>			<p>花弁の茎や枝を造るには、「ゴム」はそのままで使い、(物により、針金を芯に入れる)枝は針金、または細く削った竹を芯にし、薄い青紙の(また、他の色も)細く裁つたのを巻いて、姫糊をつけて留める。</p>	<p>花も苔も、葉も、茎枝なども、作り終われば、花葉を茎枝に取り付け、枝ぶりよく、花瓶や花籠にさすのである。すべて、この花や枝の配りは、無論、実物によって、真に迫るように、</p>		

しかし、眞の美術であれば、それでも見られるが、いかほど眞に似ていても、造り物となる。と、その欠点が大いに目立ち、宜しくない。それ故にこそ、本物をそのままに写し取つたものを美術的に見ると、十分ではないものとして、さらに人工の絵画を尊ぶ理由である。そのため、造花を学ぶものは、実物の解剖研究などは、もちろん大切であるが、なおその上に、是非とも絵画を習つて、花の配りや、枝のふりは、多く絵画の趣味を持たなければならない。

このようにして、麗しく出来上がった造花は花なき頃の室内の装飾としては、ことに必要なものである。言うまでもなく、一年の内、その半分は雪に埋もれて、青葉をさえ見ることが難しい北海道地方の人々、生涯の多くを船中や工場の一隅で過ごす人などは、願わくば、この造花を購入して、淋しき床の上にも一点の春光を添えられればいかがだろう。中途半端な絵画よりは、かえつて心を和ませる頼りとなることの方が少なくないと思う。ことに、植物の標本などと

造花用具

鉢第一種

第二種

第三種

第四種

第五種

第六種

第七種

第八種

第九種

第十種

第十一種

第十二種

第十三種

第十四種

第十五種

第十六種

第十七種

第十八種

第十九種

第二十種

第二十一種

第二十二種

第二十三種

第二十四種

第二十五種

第二十六種

第二十七種

第二十八種

第二十九種

第三十種

第三十一種

第三十二種

第三十三種

第三十四種

第三十五種

第三十六種

第三十七種

第三十八種

第三十九種

第四十種

第四十一種

第四十二種

第四十三種

第四十四種

第四十五種

第四十六種

第四十七種

第四十八種

第四十九種

第五十種

第五十一種

第五十二種

第五十三種

第五十四種

第五十五種

第五十六種

第五十七種

第五十八種

第五十九種

第六十種

第六十一種

第六十二種

第六十三種

第六十四種

第六十五種

第六十六種

第六十七種

第六十八種

第六十九種

第七十種

第七十一種

第七十二種

第七十三種

第七十四種

第七十五種

第七十六種

第七十七種

第七十八種

第七十九種

第八十種

第八十一種

第八十二種

第八十三種

第八十四種

第八十五種

第八十六種

第八十七種

第八十八種

第八十九種

第九十種

第九十一種

第九十二種

第九十三種

第九十四種

第九十五種

第九十六種

第九十七種

第九十八種

第九十九種

第一百種

図 2. 造花用具の種類 (p.122)

下編・第五 蒔絵

蒔絵は、我が国の美術工芸中、最も特種な品である。<sup>1</sup>それは、日本の漆が極めて良好な質である上に、また、蒔絵の技術が甚だ巧みであるから、非常に、世界の賞賛を得ているのであるが、しかし、最近では、ドイツなどでたくさん類品の品を製作するように、案外価格も安く出るといふことである。それゆゑ、日本でも一層よく注意して、今以上の改良進歩を計るべき

である。ただし、蒔絵の製作は、なかなか難しいものであるから、ここには、ただ実際に、そのことの概略を述べるまでである。

1 佐藤道信『日本美術』誕生 近代日本の「ことば」と戦略『五十四―五十八頁(5「工芸」という包括概念) 講談社(一九九六)。「美術工芸」は、近代以降に西洋美術との対抗で作り出された用語で、「美術」と工芸“の意味ではなく、美術としての工芸“の意味である」としている。明治二十年代に入った頃に「美術」としての「美術工芸」と、「産業」としての「工芸」が分離される」ことになり、前代のさまざまな分野の製作技術を包括した「工芸」から巧みの技を示す「技芸」が「美術工芸」として分離し、「絵画」「彫刻」と同じく、当時新しい「美術」概念の中に引き上げられたと解説している。

平文の太刀

平文の太刀

一 蒔絵の起源、及び沿革<sup>2</sup>

蒔絵の起源は、どうもはっきりしないが、今日まで、その製作品が立派に保存されて、残っているのは、聖武天皇「七二四―七四九在位」が腰帯に下げた太刀の鞘であつて、これは奈良の正倉院に御物としてあるので、孝謙天皇が天平勝宝八年「七五六年」に、東大寺に納められたという由緒まで分かっているのである。

堀河天皇の時代の蒔絵

の蒔絵

鎌倉時代の蒔絵

る。しかし、この時代には、まだ蒔絵という名称ではなくて、末金鏤と記されてある。この御太刀は粗大な金属粉を蒔きつけて、その上に黒漆を塗り、研ぎ出したもので、今から見れば、誠に粗末な製作ではあるが、それよりも、さらに不完全なものも、これ以前に必ずあったであろうと思われる。

また、正倉院の御物のうち、平文の御太刀といつて残っているのは、金銀の薄板を種々の模様彫り抜いて、研ぎ出した物である。<sup>4</sup>

その後、唐櫃、剣、厨子、机など、いろいろな物があるが、惜しい事に時代が確かに分かっている。ない。

堀河天皇の時代「一〇八六―一一〇七在位」、陸奥の押領使藤原清衡「一二〇五―一二二八」が、一寺を建立した時、その室内の装飾に蒔絵を用いてあるが、聖武天皇の御太刀などより、遙かに進歩の跡が見える。これは、陸前の国の中尊寺の光堂で、今も依然として残っている。時が経ち、後鳥羽天皇の御代「一一八三―一一九八在位」、鎌倉時代の蒔絵類は、鶴岡八幡宮に保存されてあるが、これらはかなり立派な物が多い。



天正年間の蒔絵

足利時代に至っては、この技術もますます進んだ。その各種のものが、今なお、諸侯方の家に残っているが、大抵鎌倉時代のものと同様である。

慶長年間の蒔絵

戦国時代、天正年間「二五七三」一五九二頃までは、すべて美術工芸品の進歩発達は衰えているが、それでも京都の烏丸通りには、この道の名人が多く住んでいたから、その当時の製作は烏丸物と称して、世にもてはやされていた。また、京都の高台寺の豊太閤の廟の、須弥壇の蒔絵は、慶長年間「二五九六」一六一四の作であるが、勇壮な模様が、趣味を持っている。

徳川時代の蒔絵

維新後の蒔絵

徳川時代に至っては、蒔絵はますます精巧を極めた。特に、綱吉將軍「一六八〇」一七〇九在職の頃の物を、常憲院時代物と言って、たいそう褒め称えられている。ところが、徳川末世から維新後に至っては、海外輸出等の風潮を受けて、粗雑な数物の製作のために、大いに弊風を生じたが、この頃に至って、ようやくまた、精巧な蒔絵を製出する人も出てきたから、今よりますます改良進歩したならば、明治時代のものと言って、後世に誇れるような品も製作されるようになるであろう。

るようになるであろう。

2

『蒔絵―漆黒と黄金の日本美―』京都国立博物館（一九九五）一七三頁。蒔絵は「漆の接着力を利用して金粉を器物に付着させる漆工芸技法」で、現代では、平安時代前期（九世紀）にはじまる日本独特の漆芸品のことを指す。

3

末金鏤の技法は、従来は漆液に粗い金属の粉を練り合わせ、乾燥した後には研ぎ出すと考えられたが、昭和五十二年の調査で現代の研出蒔絵と同じ技法だと判明した。「76―79 金銀鈿（きんぎん）唐太刀」『日本美術大全3―正倉院と上代絵画 飛鳥・奈良の絵画・工芸』講談社（一九九二）二二頁。なお、原文には「まつぎんろう」と振り仮名がある。金属粉を「鏤粉」と表記しているが、金や銀を鏤で粗くおろした「鏤粉」の意味であると考ええる。

4

奈良国立博物館編集・発行の『正倉院展六十回のあゆみ』（二〇〇八）の「平文―平脱」の用語解説（二七〇―二七一頁）を参照されたい。

5

鈴木規夫『東洋漆芸の歴史（日本）』『漆芸』静嘉堂文庫（一九八五）五十二―六十一頁。高台寺蒔絵は平蒔絵の一つで、梨地・針描（漆がまだ乾かないうちに描く）を多用し、秋草などを意匠化している。鈴木は、「前時代に比べて簡素な技法であるが、視覚的效果が高い」と紹介している。その他にも、先述の『蒔絵―漆黒と黄金の日本美―』（注2）で、灰野昭郎は、（高台寺蒔絵は桃山時代に一世を風靡し、簡素な技法で多く作られた。梨地と黒漆を対比させた斬新な意匠が目を引き）とも述べている（十三

頁。

6 原文では「嚴憲院時代物」と表記されている。

## 二 蒔絵法

蒔絵の法を説く前に、まず、漆の乾かし方を学ばなければならない。漆は、一種の酸化作用によつて乾くのである。まず、木の箱を作つて、その中に塗物を入れておく事である。この箱の内部は、水でよく湿らせておいて、夏季ならばたいてい数時間、冬季ならば一夜置くと漆は乾くのであるが、夏冬の季節によつて、湿らせ方の度合いに加減を要するのである。

### 漆の種類

蒔絵に用いる漆は、生漆、蝨色漆、梨地漆を最も多く使うのである。生漆とは、漆の木から掻き取ったままの漆で、主に絵を描いたり、下地を塗ったりする時に用いる。蝨色漆は、生漆に鉄粉を入れて、黒く製造したものである。黒塗には、もつぱらこの漆を用いる。梨地漆も、やはり製作をしたもので、箱の内部などに梨地塗をする時に用いるものである。

7 梨地塗に使う漆は、生漆に着色を施し、黄色味の

ある透明な漆を作る。

## 三 蒔絵の種類、及其の製作

蒔絵の種類を大別すれば、

平蒔絵、研出蒔絵、高蒔絵、さびあげ

高蒔絵、研切、肉合高蒔絵、木地蒔絵、

黒蒔絵、色蒔絵

平蒔絵は、名の如く、地も蒔絵も平なものを言う。

研出蒔絵とは、漆の中へ、絵を研ぎ出したの

高蒔絵は、肉をつけて高く蒔くのを言う。

さびあげ高蒔絵は、もつぱら肉の高いものを言う。

肉合高蒔絵は、主に、山や水を描く時に用いて肉取りをするのである。

研切は研ぎ出しの一種で、水墨の絵などを描くにはこの法を用いる。

木地蒔絵は木地に蒔絵をするものを言う。

黒蒔絵は黒塗のことで、色蒔絵は、すなわち色塗を言う。

## ○製作

### 平蒔絵の製作

まず、器物に漆で絵を描き、その上に金粉を蒔きつけて、そして、漆を乾かすのである。それが乾いたならば、生漆を塗り固めて、さらに、その乾いた後に塗り上げるのである。

### 研出蒔絵の製作

研出蒔絵は、平蒔絵と同様に器物に書いて、それが乾いた後、蠟色を塗りこんで乾かし、さらに、それを磨き炭で研ぎ出して、艶をつくるのである。

### 高蒔絵の製作

高肉のものは、金粉を蒔く前に、絵の肉取を、盛り上げるのである。その盛り上げるには、模様を漆で書いて、そして炭の粉を蒔きつく。一度で低ければ、二度蒔いて、その面を漆で塗って、滑らかにして、そして、粉蒔をする、以上と同様でよろしい。

### 本地蒔絵の製作

まず、本地の上に、糊で錫の薄板を張り付け、本地が汚れないようにしておいて、書くべき模様を切り抜き、そして、平蒔絵なり、高蒔絵なりを作り、後にそれを剥がし取るのである。よって、本地蒔絵は、研ぎ出しの製作はできないのである。

### 黒蒔絵

黒蒔絵、色蒔絵は、ただ色によって区別した

## 色蒔絵の製作

ので、その実右に述べた種々の製作に用いられるのである。色塗りも、近來段々珍しい色の発明ができてきたのは、喜ばしい事である。

蒔絵の製作を一通り習う年間は、大抵五カ年くらいであるが、それからは、何年でも、多くの時と、数多の経験を積み、そして、高尚優雅な意匠を練って、斬新な名作を出すべきである。

## 8

現代では、蒔絵の技法は大別して三種類（平蒔絵、研出蒔絵、高蒔絵）、蒔絵の地を装飾する方法は「梨地」「本地蒔絵」「沃懸地（漆が乾かないうちに金銀の鱧粉を一面に蒔く）」「金粉を全く蒔かない漆面」の四種類であると紹介されている（注2前掲書、一七三頁）。

○元号には、西暦表記による補足を行う。「天皇時代」は在位期間、人物については生没年または在職期間を「西暦」として示す。

## 第六 挿花

挿花は、もと四季折々の草木の花を折って、花瓶に挿して、その色香をもてやし、または、仏前などに手向けたのであるから、別にそ

の挿し方について一定の法式のあったのでは無いが、足利將軍時代、碾茶<sup>てんちゃ</sup>の式が始まった頃より、段々、挿花の法式も出来て、遂に、今の様に種々の流派も分かれて、広く世に行われるようになったのである。故に、その道の人の称えるように、小野妹子に始まったなどと言うのは、後世、好事の人の言いなした事であろうと思われる。

とにかく、今の挿花は、室内装飾には誠に必要のものとなり、そして、その形は、いかにも絵画に類して、美的技芸の一つに数えられるに至った。しかし、挿花の説明には、図を要することが多く、とてもこんな小冊子に述べるべきでは無いから、遺憾ながら、ここには、ただ、その一端を一言示すに止める事とした。

1 「點」は、「点」の旧漢字体であり「点」となるが、抹茶を原料とする茶道との解釈から、本稿では「碾」と訳す。

流派

法式

真・副・体

右花、左花

## 一 挿花の流派、及び法式

挿花の流派も、その支流を訪ねれば、その数の中々少なく無いが、まず、その主なるものを言えば、「池坊」<sup>いけぼう</sup>「古流」<sup>こりゅう</sup>「遠州流」<sup>えんしゅうりゅう</sup>「石州流」<sup>せきしゅうりゅう</sup>その他、なお様々に分かれて居る。そして、同じ「池坊」の中にも、また多少の分派があつて、少しずつの相違があるが、まず、京都の家元と称える方の流によつて、その法式の概略を言えば、実にその通りである。

池坊の流派によつて云えば、その挿すべき枝は、「真」「副」「体」の三つとする。枝の長短は、花瓶の大小で相違があるが、ともかくも、「真」は長く、「副」はそれよりも短く、「体」は、また、それよりも短く活けるものであつて、それからは、五枝でも、七枝でも、なお多く十一、十三というふうに、幾らも枝を副えるのである。(図3に示すように)また、右花と左花とがある。右花は床の右に活け、左花は床の左に活けるので、ひとつの時も、室の都合により、あるいは、枝の都合によりなどして、右にも左にも、活けるのである。

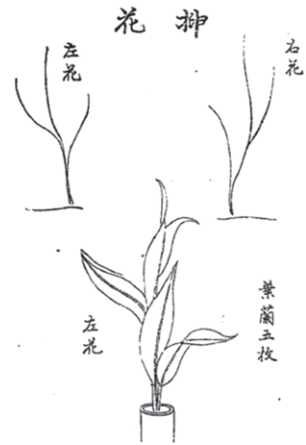


図 3. 右花、左花 (p.257)

挿花は大抵奇数に活けるのが普通であるが、万年青<sup>おもと</sup>などの様に、偶数に活ける等の取り除けもあるから、よく師について、習い知るべきである。

また、習い初めに葉蘭を活けるのは、その取扱が楽なのと、小枝が無くて、真副体等の形を見るにも容易だからである。

右に示したのは挿花の法式の一端であつて、なお様々の法が数多ある。たとえば、「これこれの花は、何々の時には活けないもの」「しじかのかのものは、何々の器に活けて、かくかくのには活けない」とか、または、「何の花は、挿花には用いない」と言う様な事があるが、とてもここには書き切れないため、よく尋ねて知るべき

である。

このように挿花を学ぶには、もとよりその方法を覚えるべきは勿論だが、一体挿花は何の為にするのかとの意味を理解しておくのが、極めて必要である。

挿花は室内の装飾に用い、人の目を喜ばせるのが目的であるとすれば、何よりも、その花と花瓶と、その室内の模様とが、よく釣り合つて、色と形との配合がよく、また、その活けた花は、十分水を上げて生き生きとしていて、そして、自然の趣味韻致を損なわないということを、第一に喜ぶべきだろうと思われるが、なお、また一つ挿花の流派法式が出来たからは、単に、植物そのものの、自らの形だけを貴ぶに留まらないうで、進んで絵画の範囲にも少し入って居るのであるから、枝ぶりも根じめも、花の位置も、殆ど書を書くような注意が、また必要である。

それで、枝を矯めるのも、無用の花や葉を切り捨てるも、みなこの目的に他ならないのである。このために、今は我が庭園に、心のままに咲き乱れたる花卉を折つて、それを挿むことを好まず、かえつて、「花屋で購入しなければならぬ」と言うに至つたのはすこぶる殺風景で、

つまらないと思われる。願わくは、この道に志が篤い人は、これもまた、一種新奇奇抜の改良を促されたものである。

立花は、書法にいわゆる、礼書のようなもので、極めて硬い式に用いるのだが、これは、枝も葉も花も、みな寸分法式に違わないようにすることを主とするが故に、枝も針金で巻き立てるという有様で、挿花と言うよりも、むしろ造花と言いたい程であるから、技の巧妙は、これによつて称すべきものも風流な趣などは更に無いものである。

## 二 挿花の用具

挿花の用具は、あまり多く要らない。即ち、鉢の種類では、高麗鉢こうらいはち大小、のこぎり、なた、水打みずうち（また、きりふぎとも）、及び水差し等である。

池坊に用いる花瓶の種類は、ずんどう、うすばた、砂鉢、花籠の類で、それ以外は、種々の名称のもとにつくつた各種のものであるが、つまりは、右の三、四種のものがもとになつて出来て居るのである（ただし、釣花生けは別であ

る。

すべて、花ものを活ける花瓶は、決して花卉や、花鳥や、その他、様々の華やかな色を施した、器は用いてはならない。場合によつては、右様のものを用いれば、挿した花は蹴られて見映えが無くなる故である。これは、何流でも同じ心得であらなければならない。



図4. 挿花用具 (p.238)



## 謝辞

この現代語訳の取り組みに際し、下田歌子記念女性総合研究所の久保貴子氏には、様々な場面で多大なお力添えを頂戴した。この場をお借りして、執筆者全員より心からの御礼を申し上げます。

おかわ・ともこ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・

生活科学部生活環境学科 教授（「諸言」担当）

おだ・りようこ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・

文学部美学美術史学科 准教授（「蒔絵」担当）

さとう・さちこ／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・

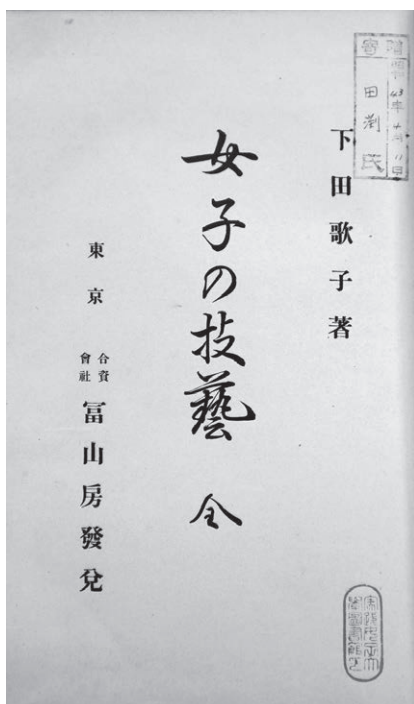
生活科学部食生活科学科 教授（「挿花」担当）

ごちよう・ひろみ／下田歌子記念女性総合研究所 客員研究員・

実践女子大学 名誉教授（「機織」担当）

せき・とみこ／下田歌子記念女性総合研究所 客員研究員・

実践女子大学 非常勤講師（「造花」担当）



『女子の技芸』扉（実践女子大学図書館蔵）